

森か畑か，ペルーのアマゾン

大橋 麻里子

私「どこに行くの？」

村人「カチョ」

「なるほど，森はカチョと言うのか」とその時私は思った。それは，銃を片手に夕飯の食材を探しに集落から森に入っていく村人に尋ねた時のことである。しかしながら，彼らの言語には日本語に相当する「森」という言葉が存在しなさそうであることに気がついたのは，もっとずっと後のことである。

はじめに

私は2008年11月から今日までに断続的に合計約15か月ペルーアマゾンに訪問するなかで，その森に棲む先住民の村に滞在してきた。彼らはシピボ(Shipibo)と呼ばれる民族である。私が通うのは人口約120人(16世帯)のドス・デ・マジヨ(Dos de Mayo)村である。村人は焼畑でキャッサバやバナナを栽培しながら，漁撈，狩猟採集を生業活動として行っており，現金収入として主にトウコロモシや木材の生産・販売，出稼ぎをしている。住居は基本的には壁のない高床であり，夜は蚊帳を吊って眠りにつく。昔は，近い親族だけで小さな集落を築き，魚や動物といった食資源の豊富な場所に転々と住居を移動させながら生活をしていた。村には電気も水道もなく，都市のプカルパ市までは乗合船で20時間と丸木船で1時間かかる(これでもペルーアマゾンではかなり都市部に近い方である)。1977年に1人の男性によって開拓された集落が今の村の原型である。1984年に行政区分である先住民族コミュニ

ティに認定されてドス・デ・マジヨ村となり，今日では約2,399haの土地利用権を持つ。

2008年，修士論文のフィールドを探していた私はアマゾンに行くことに決めた。「森といえばやっぱりアマゾンだ」とその時は何とも単純な発想ではあったが，私はうっそうとした森のなかで生活をしている人びとのところに行きたかった。

それから縁あって，今のペルーを南北に走るウカヤリ川の上流にあるドス・デ・マジヨ村に通うことになった。村にいるときには村人の家に居候しながら，焼畑の除草やバナナの収穫，居候先のお母さんの子守をする傍ら，調査をする。彼らの言葉であるシピボ語を学びつつ，昔の話を聞くのが楽しくて仕方がない。そうしたなかで，少しでも彼らに近づけるように，森の「資源」についての知識を習得してそれを駆使できるようになりたいと思ってきた。

1. 氾濫原に住む人びと

そうして村に滞在しながら「人びとが森とどう付き合っているのか」ということを探るなかで，まずは彼らの生活の基盤となっている焼畑の実態に興味を引かれた。なぜならば，村では焼畑と森林は密接に関連していると思われたからである。

以下では，まず村人がどのような土地に焼畑を行っているのかについて説明する。アマゾンの土地は大きくわけてテラフィルメ(高地)とヴァルゼア(氾濫原)にわけられる。村人をはじめとするシピボは，アマゾン川の源流の1つであるウカヤリ川

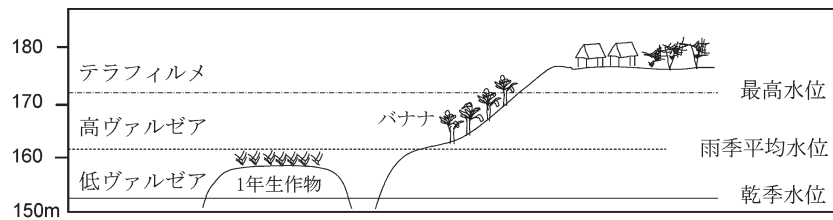


図 1 村人が利用する土地の分類

の河川敷を拠点に生活をしており、彼らの主な生活拠点はヴァルゼアであると言われてきた。ドス・デ・マジヨ村の人びとは、ヴァルゼアだけではなくテラフィルメにも畑を開いている。2009年の時点で村人が農作物栽培に利用している土地は、彼らの分類によれば大きく以下の3つにわけられた(図1)。

①低ヴァルゼア：雨季に必ず浸水する土地，②高ヴァルゼア：雨季でもぎりぎりのところで浸水せず数年に一度の大氾濫で浸水する土地，③テラフィルメ：全く浸水することのない土地である。①と②のヴァルゼアで行う農耕は氾濫原農法と呼ばれ，テラフィルメで行われる農耕とは明確に区別されてもきた(Denevan 2002)。

2. バナナの畑か、バナナの森か？

村人はバナナ (*Musa*, spp) をよく食べる。村の13世帯を対象に1日に2回訪問し、食事における食材の出現回数を記録したところ、全観察回数1213回のうち主食作物を利用したのは1172回であり、そのうち78.5%以上の食事においてバナナが食べられていた。そしてこのバナナは、主に図1の高ヴァルゼアに植えられている。バナナは草本性の植物であるが、一見すると樹木だと勘違いされることもあるほどに草本にしては背が高く、茎のように見える部分は実は葉鞘で、「偽茎」とも呼ばれる。

筆者が村に入った当初、居候している家の人びとがバナナの収穫に行くというので、一緒に連れて行ってもらった。丸木舟に居候先の家族と一緒に乗り込み、三日月湖を渡って対岸に着くとさらに支流に入って行った。ゆっくりと村人が丸木船を進ませ

るなかで、「なぜこんな遠いところに畑を作るのだろう」とその時は思った。丸木舟を降りると巨大なススキのようなイネ科の *Gynerium sagittatum* が成育しているところに人が通れるだけの道があり、そこを進むと彼らが畑と呼ぶ場所に着いた。バナナがいたるところに茂っており、パパイヤ (*Carica papaya*) やパンノキ (*Artocarpus altilis*) などの樹木もあり、日本人の私から見たらそれはバナナの畑ではなく「バナナの森」と言ってもよさそうに思えた。パイオニア樹種 *Cecropia polystachya* が林立しているところが畑の境界だと思うがそこに近づくほどにバナナは藪に埋もれており、私から見れば畑と二次林の境は非常に曖昧に見えた。

3. バナナの焼畑を川沿いに拓くことの意味

焼畑地の雑草が人自分の背丈よりも大きくなると、村人は大量にキャッサバの口噛み酒を用意して、村中の人を集めて皆で一気に刈る。除草は各世帯が各自の畑だけを行うということは少なく、大抵の場合は収穫に行った時だけ収穫予定のバナナの周りをちょっと除草する程度である。畑は基本的には大かれ小なかれ「藪」のようになっている。

また、1つの世帯が複数の場所に渡って畑を持っているのだが、皆が一体どこにバナナを植えているのかを把握するために、GPSを用いて村人全員の焼畑の位置を記録した。その結果、畑は実に支流と三日月湖沿いに拓かれていることがわかった(図2)。計測しているときは気が付かなかったものの、データを地図上に落とすと支流が近くに通っている畑が殆どだった。

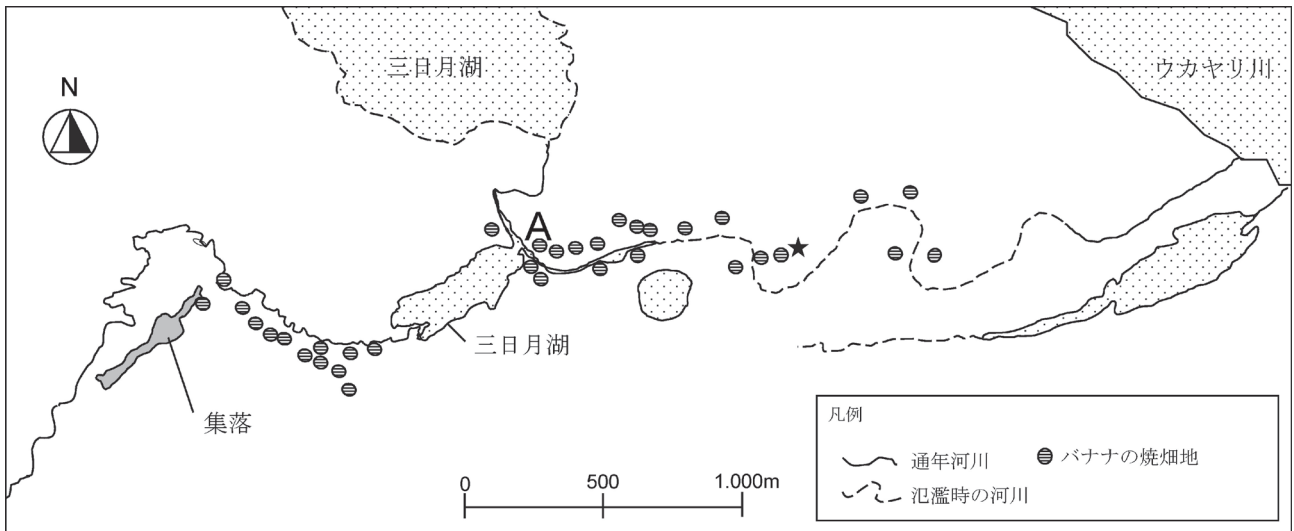


図2 バナナの焼畑地の位置図(2009年)

注1: Garmin 60CSx™ GPS を用いて計測した。計測できなかった場所は部分的に聞き取りによって補っている。

注2: ここでは便宜上バナナの焼畑地と呼んでいるが、バナナの焼畑地はすべて混植である。また焼畑地は他にもあるがここではバナナを主要作物とする焼畑地のみを記載している。

はじめて村を訪問した時は雨季の始まりであったために、集落から家主の畑(図2-★印)の近くまで水路からアクセスできた。だが、乾季に訪問した時には図2のA地点から家主の畑まで他の人の畑の中を歩いて歩くことになった。行きはともかく、帰りは重たいバナナを頭から引っ掛けて歩くことになる。畑によってはすでに藪のようになっていたり通り道に伐開のときの倒木がそのまま倒れているところもあり、バナナをひっさげながら倒木をよじ登るのは大変なことだった。苦労したのは私だけではなかったようで、村人も家に着いたら、「疲れた」と言いながらハンモックでユラユラと揺られていた。

さて、人びとが河川沿いに焼畑を拓くことの意味として考えられるのは、雨季になると水路から直接にアクセスできるということである。ただ、いくら雨季が長いにしても、すでに紹介したように乾季に重たいバナナを背負って長い距離を歩くのは大変である。

バナナの畑を川沿いに開く理由は、アクセス以外にもこの土地がヴァルゼアであることに由来する。村人が言うには、ここに拓かれた畑は数年に一度の



図3 高ヴァルゼアの畑が氾濫した時の様子(出所) 筆者撮影

大氾濫によって浸水し、その時に肥沃な土壌が流されてくるのだそうだ。実際、バナナの畑の多くが、2011年と2012年に浸水していた(図3)。ただし氾濫が1か月以上と長く続いた時は、バナナが根元から浮き上がって倒れてしまうので、収穫できるバナナがなくなってしまふ。そうした時のために吸芽が

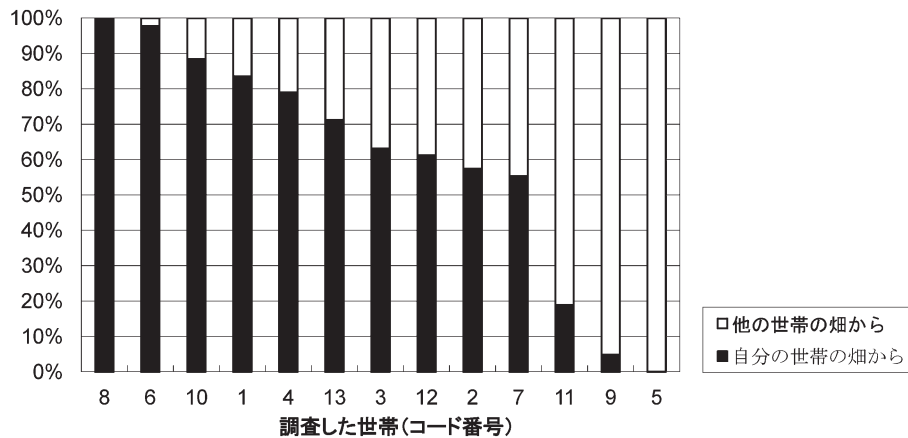


図 4 食事に出現したバナナが収穫された畑 (n=913)

注1: 調査期間は2009年5月9~28日, 6月9~29日, 7月6~18日の計56日間であるが, 世帯6については不在の期間があったため5月6~29日, 7月6~18日の計37日間となっている。

注2: 双方からのバナナが同時に一つの料理に使われたのは11回であったが, その場合は0.5として計算をした。

たくさんでることから氾濫時の水位の上昇にも耐えうる panchaa paranta や paro paranta と呼ばれている「氾濫対応型バナナ」を, 村人は特に浸水しやすい場所に植えるなどしている。こうして, 浸水によって数十年という長期に渡って同じ畑からバナナを収穫し続けることができるヴァルゼアの特徴や作物の種類を, 人びとは試行錯誤しながらもうまく利用しているのである。

4. 自分のバナナをあげて他人のバナナを食べる

ところで, 集落内では「バナナ貸して～」と誰かが他の世帯を訪問している光景をよく見かける。皆自分の畑をもっているはずなのに, なぜそんなに頼んだり頼まれたりするの。そこで, 食事に出てきたバナナがどこの畑から収穫されたものかを調べた。その結果, 自分の畑から収穫したバナナで賄っている世帯は1つだけであり, 多くの世帯は他の世帯のバナナを少なからず消費していた(図4)。

各世帯の消費量と他世帯から具体的な入手方法, その理由およびその分量については Ohashi *et al.* (2011) を参照頂くとして, ここではどういった理由で他の世帯の畑から収穫しているのかについ

て, その一部分をお伝えしたい。

ちょうど自分の畑に収穫できるバナナがないことから収穫させてほしいと頼む以外にも, 集落に近くて徒歩で行ける畑を持っている人に対して, 丸木船で行かなければならない場所に畑をもつ人が「雨が降っているので自分の畑に収穫に行けないから収穫させてほしい」と頼むことや, 井戸端会議で盛り上がった時に「明日は(自分の)畑と一緒に収穫に行こう」など招待することがされており, 自分の畑にバナナを持っていても他の人の畑から収穫させてもらっていることもあった。さらに, 数年ぶりに村に戻ってきて畑を持たない人に対しては, 収穫に招待したり収穫してきたものをあげたりして, バナナを積極的に提供することがされてもいた。こうして, 他の世帯の畑から収穫されたバナナを食べるといったことの裏には, 実に様々な経緯があることがわかっていった。

そんな矢先, 老人男性と話していた時に, 彼が「主のいないバナナは他の人が尅るためにあるのだよ (iboma paranta shatoti)」と言った。私は意味がよくわからなかったもので, その意味について聞き返すと, 「自分が他の集落の親戚の家や都市のプカルパに滞在しているときに, バナナがなったとする

と、誰が食べる？その時に実をならせたバナナは他の誰かが収穫しないとダメになってしまう。だから畑の持ち主がいないときになったバナナは他の人が伐るためにあるのだよ」と説明しなおしてくれた。

5. 行政村を超える資源利用

シピボの人たちは行政村を超えてよく出かけて行く。彼らはもともと1か所にとどまらずに生活をしてきた人びとである。こうして再び村に戻ってきた人にバナナを積極的にあげたり、畑の所有者がいなければその作物は不特定多数の人が収穫できたりするなど、これはシピボの人びとがもともと移動性の高い生活を送ってきたことに由来すると筆者は考えている。

日本を例とすれば、家の人が留守だからと言って畑にある作物を他の人が勝手に収穫をしたら怒られると思うが、ドス・デ・マジヨ村ではバナナについては、それがあつ程度の範囲で許されている。つまり、資源の所有者であってもその人が独占的に利用しているわけではないのである。別の村に移動すれば畑から収穫が可能になるまでは他の人から作物をもうことができ、また自分が村に不在のときにはその時になった作物を誰かが消費してくれる。こうした資源の利用方法は、人が動くことを補完するような在来のシステムの一部であるともいえるだろう。人びとは、行政村という境界が設置された後でも、それを越えて行く資源利用のあり方を実践しているのである。

まとめ

「森林」という概念のない社会

近年では、アマゾンの森をめぐる「生物多様性」「気候変動」そしてREDD+といった言葉が錯綜している。そうした場合、大抵は「森林」というキーワードが掲げられることが多い。例えば、REDD+であれば二酸化炭素吸収源としての「森林」である。そして、今日こうした枠組みを実地レベルに落とす時に、地域住民をいかに巻き込むかという課題が挙げられていることは、すでに周知の事実である。

こうして村人と生活をするなかでわかってきたことは、冒頭に記したように最初は私が「森」だと思っていた「カチョ」という言葉は、実は誰も焼畑を行っておらず原生林に近い状態の「森」を指しているらしいということだ。「森」あるいは「森林」に関連するシピボの言葉として、焼畑地 (huai)、二次林 (nau)、原生林・それに近い状態のもの (cacho) といった区別が存在する一方で、「森」もしくは「森林」とを表す言葉はシピボ語には存在しないようである。これは「川」についても同様に行うことができ、本流 (parun)、支流 (tau)、三日月湖 (yan) と言った言葉が会話のなかで明確にされる一方で、それらの総称を示す「川」という言葉は確認できていない。ペルーアマゾンの氾濫地帯で生活をする人びとは、その生活圏を「森」や「川」といった分類をする必要はなかったのではないだろうか。彼らは生活において、いつだって明確に、藪、二次林、原生林として区別することが普通であり、村人は自分たちの生活空間から「森」という樹木に着目した空間だけを取り出して何かを語ることはしてこなかったと考えられよう。

筆者が指摘したいことは、ここで村人の生活の中には存在しない概念である「森林」を外部者が強調してしまうことで、地域社会に何がしかの問題を引き起こすことになるのではないだろうかということである。具体的に言えば、ドス・デ・マジヨ村において、そもそもすでに誰かが焼畑を行った後の二次林は、その個人（世帯）が所有者と見なされ優先的にそれを利用できると認識されてきた。だが、それは絶対的なものではなく、状況に応じて、他者（世帯）が利用することもされている。このように、資源をめぐる所有者と利用者が必ずしも一致しない社会に、外部者が定義する「森林」が組み込まれる時、社会のなかではどのようなことが起きるのだろうか。村人のなかでは、公正な利益分配が試行錯誤されるようになるのかもしれないが、その時に、二次林を多くもつ者が利益を多く受けることを主張するようになることや、もしくは自分の二次林であることを強調して畑を持たない他者に貸し出ししなくな

るようなことも起こりうる。所有者のいる二次林から他者が薪のために木を伐採することも当たり前のようになされてきたが、それが許されなくなる可能性も考えられる。「地球」環境問題を解決するために、「森林」を持つ地域住民に利益が落ちるようにと考慮されたシステムによって、地域社会の資源をめぐる所有者と利用者が一致する方向に進む時、住民間での不和や軋轢が生じてしまう可能性がある。

今日の地球環境問題において地域社会は欠かせない対象であるとは散々言われてきているが、その一方で、外部者が意図しなかった問題を、地域社会に生じさせてしまう可能性があることを、我々外部者は認識すべきであるように思う。

「地域」と「地域」をつなぐ視点の重要性

「地球」環境問題を掲げて外部から導入される政策は、基本的に法律上の行政区分を基準として導入されることが多い。ペルーを含むアマゾン諸国を例にしていえば、REDD+の実地レベルの導入の課題として、まずは先住民族コミュニティの土地境界の明確の必要性が囁かれてもいるようだ。その一方で、本稿で報告したような行政村を超えた資源利用が今日でも実践されているシピボのような社会もあるなかで、行政村の境界を強調することが、一体どのような影響を及ぼすことになるのだろうか。

森林を「持っている」ことによって利益を得られるようになる時、やはり利益分配をめぐる新しい人を受け入れたがらなくなる問題が生じるかもしれない。それは、今までは集落間を自由に移動してきた彼らの生活様式を制限する事態を生じさせることを意味する。そもそも、シピボの人びとが行政村という社会単位を受け入れることになったのはつい40年くらい昔のことではかないのである。

井上 (2009) は、“Think globally, act locally” “Think locally, act globally” という言葉を例に、「地球」環境問題と「地域」環境問題は強く関連しているなかで、これらの言葉は「地域」間の利害が衝突することを想定していないと指摘する。ここで井上が言う「地域」は、単純に行政村と前提としているわけではないと思うが、行政村を単位として導入される政策を前提にするならば、「地域」間の関係にも着目することが、シピボのように広範囲におよぶ関係性をもつ社会においては社会関係の崩壊を招くことなく、「地球」レベルでの環境問題の解決に取り組むためのカギとなるように思う。

私は一人の外部者として、そして一人の村人として、彼らとともに過ごすなかで、その生活と社会がどのように変容していくのかを見守って行きたい。

初出一覧

本稿の内容は以下の論文として公刊している一部分である。

Ohashi, Mariko, Toshio Meguro, Motomu Tanaka, Makoto Inoue, 2011, “Current Banana Distribution in the Peruvian Amazon Basin, with Attention to the Notion of “Aquinquin” in Shipibo Society.” *Tropics* 20 (1): 25-40.

大橋麻里子 2013 「アマゾンの氾濫原におけるバナナの自給的栽培—ペルー先住民シピボの事例から」『Biostory』19: 85-94.

〔参考文献〕 Denevan, W.H. 2002 *Cultivated Landscapes of Native Amazonia and Andes*. Oxford University Press. London. 井上 真 2009 「自然資源『協治』の設計指針—ローカルからグローバルへ」室田 武 (編) 『グローバル時代のローカル・コモンズ』: 3-25